

# 半導体漫遊記

183

## 湯之上隆

経営難に陥り、2016年8月に債務超過で東証二部に転落したシャープは、その後、鴻海精密工業に買収された。鴻海で郭台銘董事長に次ぐナンバー2の地位にある戴正呉氏がシャープの社長に就任した後、部材の共同調達によるコスト削減などの構造改革を行い、2017年度通期で営業利益も純利益も黒字化を実現した。その結果、シャープは僅か1年4カ月で東証一部に復帰した。

それが奏功して、新卒採用は2.2倍に増え、従業員の年間平均給与は22%増加し、株価が約4倍になった。このことから、戴社長の手腕に対しては、大絶賛の声で埋め尽くされているという。

しかし、筆者は、「シャープは真に『復活』などしていない。危篤状態から一命を取り留めたに過ぎない」と思っている。その根拠を以下に示したい。

# シャープは『復活』していない

## 危篤状態から脱したに過ぎず

というには程遠い。営業利益は、2007年度の1865億円が最大で、リーマン・ショック後は、赤字と黒字を繰り返している。営業利益率は、2000~2008年度0.00~2.008年度0.00までは、4~6%辺りを維持していたが、2009年度以降は、乱高下している。鴻海が買収した2016年度以降は、黒字となった。2017年度はピーク時の約74%の4万2千人弱となった。

要するに、シャープが黒字を確保できたのは、研究開発費と設備投資を極限まで削減し、従業員を26%減らしたリストラ効果によるものである。つまり、止血して黒字化を実現しただけであり、

シャープの売上高は、リーマン・ショック直前の2008年度に3兆4177億円、ピークアウトし、鴻海が買収した直後の2016年度には、最も問題だと思ふのは、研究開発費、設備投資、従業員数である。研究開発費は、2002年度以降、増大していき、2008年度に1961億円で最大となるが、017年度はピーク時の約74%の4万2千人弱となった。

後、設備投資額は急激に減少し、鴻海が買収した2016年度にはピーク時の13%の452億円にまで低迷している。

鴻海は、シャープを買収後、約8000億円を投じて、中国や米国に世界最大級の液晶パネル工場を建設すると発表した。シャープが真に『復活』したと言えるのは、米中の巨

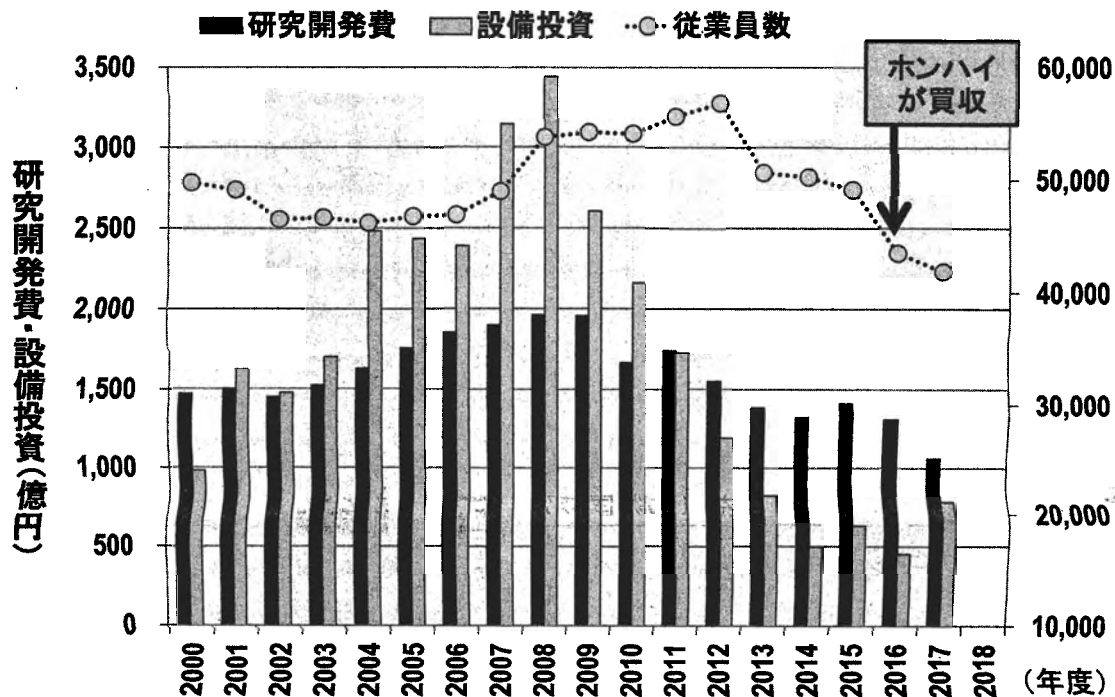


図1 シャープの研究開発費、設備投資、従業員数

出所:シャープのIRデータより筆者作成

大液晶パネル工場が本格稼働し、それによって継続的に利益を得るようになる。今はまだ『復活』と言える段階には長くない。

(微細加工研究所・所)